

主催事業サマースクール

「昔々のべつかい〜勾玉づくり」

8月3日（火）郷土資料館サマースクールを実施しました。お話の後、古代の装飾品「勾玉づくり」に挑戦しました。滑石（かっせき）という古代から使われている石を紙やすりなどで2時間ほどかけて削ります。慣れない作業で悪戦苦闘しましたが、思い思いに満足した勾玉を作ることができました。夏休みの工作用に作成した参加者もいたようです。



根室管内新任教諭研修会

「野付半島の近世の遺跡を巡る」

8月5日（木）根室管内新任教諭研修会が別海町で開催され、フィールドワーク「野付半島の近世の遺跡を巡る」を行いました。半島先端には、野付通行屋跡、番屋跡遺跡が所在していることから、両遺跡の歴史的経過のお話や遺跡を巡りました。両遺跡間は、長靴を履いて歩きましたが、潮が込んで来ると長靴が濡れるなどのハプニングもありましたが、こうした体験により、学校教育で身近な地域における歴史を教材化する視点を身を持って体験出来たと思います。



西春別小学校出前講座

「江戸時代の別海町」

8月23日（月）西春別小学校5、6年生を対象に「江戸時代の別海町」についての出前講座を実施しました。社会科で学んでいる歴史学習をより深めることを目的としており、教科書では、徳川幕府となった江戸時代、そして、蝦夷地と呼ばれていた北海道や別海町では、どんなことがあったのかを中心にお話しました。アイヌ民族最後の戦い「クナシリ・メナシの戦い」、ロシアの使節ラクスマンの本別海来航、伊能忠敬ニシベツでの測量、ニシベツ献上鮭の製造などです。難しい専門用語などもありましたが、担当の先生から、「教科書や資料集にはない地域の歴史についてふれることができ、さらに、日本の歴史とも密接に結びついていることを知り、大変貴重な学びの場となった」とのご感想をいただきました。



近世の別海を探る 「西別川河口から南、風連湖内」～その6～

フウレントウ

文献史料の標記は、「フウレントウ」「フウレン」「フーレントー」「フウレン沼」「フウレン湖」「風蓮」「婦宇礼奴董（フウレントウ）」などがあります。

○地名の由来

☆〔フウレン・フウレントウ〕

・「フウレンは川（沼）の名。夫より沼へ落る。」「沼」

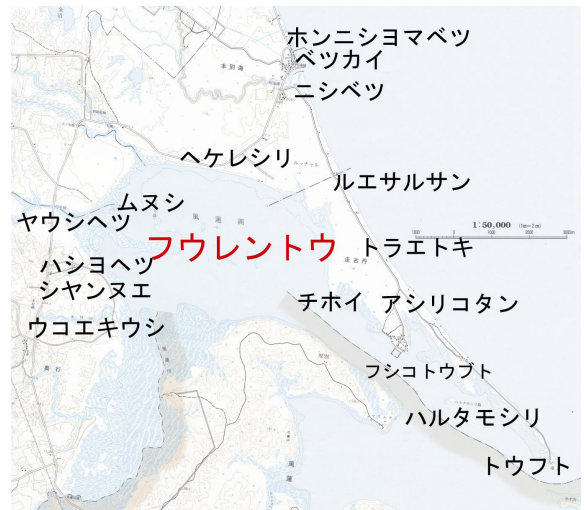
『東行漫筆』荒井保恵 文化6年(1809)

☆〔フウレントウ〕

・「沼名フウレントウト云フ。フウレンベツト云フ川ヨリ落下り水色至テ悪シク見ヘタリ。蝦語赤キヲフウレン

ト唱フ、然レバ此川赤水ニテ宜シカザルユヘ斯克名ヅクルト云フ。」

『入北記』玉蟲左太夫 安政4年(1857)



『別海町管内図5万分の1』別海町役場

○地勢・建物など

前期松前藩時代 18世紀後半

・「九月十一日晴 北風発西別フウレン入海を舟溯して乗上ル 風蓮海口八九丁周匝三四里汐半にハ舟を引かせて通る所有」

『蝦夷日記（別称酔古日札）』木村謙次 寛政10年(1798)

幕府直轄時代 寛政11年(1799)～文政3年(1820)

・「フーレントーとかいふ、いと大きな湖に行なり。こゝは、いとよきけしきの見どころ有所也。湖をうちめぐらしたる高峯かさなりたちて、木ぶかき、しげ山のつゞきたるは、えもいはずよきさま也。」

『蝦夷の嶋踏・附図』福居芳麿 享和元年(1800)

松前藩復領時代 文政4年(1821)～安政元年(1854)

・「トウバイロよりトウブトロ迄フウレントウ惣周廻里数凡拾四里三拾丁」

『古人の邑嚙 嘉永七甲寅年閏七月〔子モロ場所〕』加賀伝蔵 嘉永7年(1854)

幕府再直轄時代 安政2年(1855)～慶応3年(1867)

・「此フウレン〔風蓮〕湖（周凡十里、南にベトカ〔邊特加・別當賀川〕、北にフウレンベツ〔風蓮川〕に落入る）其形納沙布誌に出せば略レ之。魚類は川魚・海魚二様共に盛なる。また貝介類多し。扱是より船にて出立、向に渡り而…」

『東西蝦夷山川地理取調紀行 東蝦夷日誌』松浦武四郎 安政3年(1856)

別海町郷土資料館だより No.134

発行日 平成22年9月1日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記

夏らしい日が続いた8月でした。新任教諭研修会は、野付半島なので、蚊が恐ろしいほどいます。長袖、長ズボンで炎天下を歩き、さらに、潮まわりが悪く、長靴が濡れましたが、海水は冷たくて気持ち良かったです。若い先生方と歩き、いろいろ楽しい一日でした。(K.I)